

京都大学大学院医学研究科
社会健康医学系専攻
遺伝カウンセラー・コーディネー
タユニット
平成 18 年度
第 1 期生による
コース全体に対する
1 年間の感想

一年間を振り返って

遺伝カウンセラーコース ○○ ○○

この一年間でたいへん多くのことを学んだと感じている。前期では、医学の基礎知識から遺伝学の基礎知識を詳しく学ぶことができた。これらから得られた知識は後期から始まった実習で大いに生かされているほか、医療職としての視点のあり方を考えるきっかけとなった。また遺伝カウンセリングで医療の情報提供と並んでもう一つの大きな柱と考えられているコミュニケーションについても少人数で学ぶことができた。遺伝カウンセラーとして、まずは自身を見つめることが重要であり、半年かけてゆっくりと訓練できたことはたいへん貴重であった。

社会健康医学系専攻として医療統計学や疫学、医療経済学を学ぶ機会に恵まれた。遺伝カウンセリングというまだまだ未成熟な分野において、研究を充実させ社会的認知度や重要度を確かなものにしていくことは大切なことであり、これらの知識は必ず役に立つものと確信している。

後期に入ってからには遺伝カウンセリングの実習が行われ、遺伝カウンセリングの技法だけでなく、考え方やクライアントへの関わり方を学んだ。実習を行うにあたり、ロールプレイから得たものはたいへん大きかった。模擬患者を相手に疾患の説明や心理的なサポートを試みることでその難しさを体感し、担当教官らのきめ細かいアドバイスを受けて自分の遺伝カウンセリングについて深く考える機会をいただいた。

一年間を通じて行われている合同カンファレンスからも常に新しい刺激を得ている。一つ一つの症例について専門家の先生や学生から多くの意見があり、視野を広げることができたと思う。さまざまな分野から疾患の報告があるため、多くの疾患の詳細や遺伝カウンセリング上の特性を理解するのにとても役立っていると感じる。

またこの一年間に多くの学会、セミナーに参加させていただいた。一つ一つがとても充実したものであり、新しい知識をたくさん得ることができた。遺伝医学の現在の状態や問題点、取り組みなども知ることができた。また、同じ志しをもつ多くの先生方や学生と交流を深めることができたのはとてもよい経験であった。

この一年間はたくさんの知識を学び、経験し、多くの人に支えてもらいとても充実したものであった。現在は課題研究に取り組みながら、遺伝カウンセリングについてさらに勉強して少しでも自分のものにできるよう、がんばっていきたくないと決意を新たにしている。

【遺伝カウンセラーコースのカリキュラム全般について】 1年を通して、この分野でトップレベルの多くの先生方から、中身の濃い教育を受けさせていただきました。単に受身の教育ではなく、実習や合同カンファレンス、課題研究をはじめ、新しい分野でのシステム構築のために、未熟な私たちに数多くの経験をさせていただき、有意義な1年を過ごすことができました。

授業について振り返りますと、専門科目は、遺伝医療の幅広い見識が得られるとともに、コミュニケーションや臨床研究に関わる分野の授業も受けさせていただき、大変役立ちました。特に遺伝医学の分野は、先生方、授業内容ともにとっても充実していました。バックグラウンドの異なる院生たちに、基礎から丁寧に教えていただき、個々の質問にも対応していただいて、とても感謝しています。1 通り授業が終了した現在でも、配布資料や録画ビデオなどで気になる点を見返すことができますし、同席させていただいている実習や取り組み始めた課題研究にもその多くが役立っているような気がします。専門科目だけでなく、社会健康医学のコア科目も、他の SPH の院生さんと同じように、選択することができ、公衆衛生の分野における、自分の知識を広げるとともに、今後の課題研究に役立つような知見を得ることができました。また、学会やセミナーなどにも数多く参加させていただいたことで、他の大学院の遺伝カウンセラーコースの教員・院生をはじめ、遺伝医療に関わる医療者・研究者と交流する機会も持て、普段の授業や実習とは別の見識を得られたのは幸いでした。後期には、授業だけではなく、実習を通して遺伝カウンセリングの場を体験することで、それぞれの疾患に対する理解を深め、クライアントとの関わりを通して、情報提供のあり方や心理・社会的フォローの仕方について、学ぶことができました。

上記のように、様々な経験をさせていただくことで、充実した日々を送ることができ、幅広い知見を得ることができました。時には膨大な課題に追われ、夜遅くまで頭を抱えていることもありましたが、できない自分を歯がゆく思うこともありましたが、振り返ってみると、1 年前よりは成長した自分がいることを実感しています。しかし、逆にいうと、物理的な時間不足もあって、1つ1つが自分の思うようにやり切ることができずに、消化不良に終わってしまうこともありましたが、カリキュラムから見ると、1 年次にかかなり負担がかかっているように思えるので、もう少し分散させてもいいのではないのでしょうか。特に、1 年前期に必修の授業が集中しており、2 年以降は、授業はほとんどないという状態になっているので、選択時期に幅をもたせてもいいと思います。また、実習などの都合上、聴講したい 3,4 限の授業に出ることができないことがあったのは、残念です。2 年というカリキュラムの中で、授業と実習、研究を行うとなると、何かに制約が出てくるのは仕方ないことであると思いますが、ユニット内の先生方が行う授業には、できるだけ参加できるようにカリキュラムを検討していただければ幸いです。また、心理・コミュニケーション関係の授業は、もう少し必要なのではないかと思います。心理的に問題のあるクライアントが遺伝カウンセリングに来談したときに、心理職に依頼するというスキルが必要とされますが、そのようなスキルを現在の授業枠で身に付けるのは難しかったと思います。そのほか、個人的には遺伝統計に関わる授業を聴講する機会があればよかったです。今後、遺伝カウンセラーのようなコーディネーター的な医療職であっても、そのような分野に対するある程度の理解が必要になると思うので、何らかの形で、授業や講演を聴講できる機会があればよいと思いました。

全般を通しては、満足していますが、今後も可能な範囲で、新しい専門職の養成のあり方について検討していただければ幸いです。

①講義について

前期は、講義を通して遺伝カウンセリングの基礎を集中的に学ぶことができ、それが後期から始まった実習に応用できていると思います。ただし、前期には、遺伝カウンセラーコースの授業以外にも様々な講義があり、講義の内容を予習・復習する時間は持てなかったもので、本当に知識が身に付いているのか疑問を感じていたのが正直なところです。また、短い間に膨大な知識を詰め込んだので、それら全てが今も頭に残っているとは言えません。実際に、後期から始まった実習の中で「講義で習ったのに覚えていない」というような状況に直面することもありました。でも、講義では遺伝カウンセリングの重要な項目を網羅して頂いていたので、分からない内容のキーワードから前期の講義を振り返って、理解を深めることができたと思います。講義で習った内容を全て覚えているのは難しいですが、講義を通して学んだキーワードや考え方を覚えていれば、資料を検索したり講義で習った内容を復習したりすることができ、それを繰り返すことで自然に理解が深まっているような気がします。

このような思いを抱きながらも、講義が1年次の前期に集中していることから、卒業まで十分な知識を維持できるのか不安があります。これからは、自分自身で勉強を続ける必要があることは理解しています。ただ、1人で勉強しているのみでは目標を定めにくいので、2年次にも復習型やテスト式などの授業があれば、自分には足りない点に気付くことができる良い機会になるのではないかと思います。まずは、復習を兼ねて出来る限り新入生の講義に参加したいとも思っています。また1年間の講義を通して、遺伝カウンセリングの遺伝医学的な知識や考え方は、講義の中で重要なポイントを網羅して頂いていたと思いますが、心理学系統の講義数は週に1コマしかなく、心理学的な側面は十分に学べなかったような気がします。医療や遺伝カウンセリングでの応用については、他の講義やスーパーバイズを通して身に付けることができたと思いますが、私は生命科学系出身で心理学について学んだことがなかったので、心理学については理論のような基礎から固めていきたくかったです。

②学会・セミナー

学会やセミナーへの参加は、普段の講義とは異なる側面から遺伝カウンセリングを学ぶことができる非常に有意義な機会を与えてくれました。学会では、遺伝カウンセリングをはじめ関連領域の研究や最近の動向を知ることができました。セミナーでは、ロールプレイやグループワークを通して、遺伝カウンセリングの知識を習得するのみならず、様々な参加者の遺伝カウンセリングに対する考え方を知ることができました。さらに、学会やセミナーを通して、遺伝カウンセリングや関連領域に従事する先生方のみならず他大学院の遺伝カウンセラーコースの院生と交流することができ、同じ目標に向かって取り組んでいる者同士で情報交換ができて良かったです。

遺伝カウンセラーコースの1年間を振り返って

遺伝カウンセラーコース 1年生 ○○○○

一年間の授業スケジュールとして、前期に基本的な知識を勉強し、後期に実践でいかすというのは、とても理にかなっており、現実にも実習で勉強した知識が生かされているので、非常にカリキュラムとしてうまく回っていると感じました。基礎的な知識についての講義が充実していたので、遺伝に対する考え方がぶれなくなりました。試験の到達レベルが高いため、前期終了時の知識量は、入学前とは比較できないほどでした。

また、授業の中で、実習にもっとも生かされているのは、基礎人類遺伝学と臨床遺伝学です。どちらも、遺伝カウンセリングの中心である疾患についての知識に直結しており、非医師にとってもっとも弱く、不安に思っている部分なので、非常に有用でした。この2つの授業のような授業をより増やしていただければ、個々の疾患への理解や考え方が深まり、実習の際にも役立つのではないかと思います。ベイズの定理や遺伝子検査など、院生の大半が不得意な分野は、もう一こまくらい増やして頂いて、徹底して教わったほうがよかったです。なぜなら、授業が終わって、時間が経つと身につけていなかったことがわかり、なかなか独力で克服することが難しく感じました。

医療カウンセリング概論や医療コミュニケーション実習などのカウンセリング・マインドについての授業は、カウンセラーとしての専門性に関わるため、実習に直結するスキルとして知識と同じくらい重要であると認識しており、実際カウンセリングの原則を学ぶ上で非常に勉強になりました。今になると、前期のような授業形態も良かったと思っています。後期になってからはロールプレイの後など、浦尾先生から直接アドバイスがいただけるので、その言葉一つひとつが、自分の遺伝カウンセリング時の言葉を振り返るときの指標になっています。そして、実習をしているときに、できるだけ習ったカウンセリング・マインドが使えるよう心がけられるようになったことは、学んだことによる大きな変化でした。

一年間でもっとも強く感じたことは、本当に一期生なのだ、遺伝カウンセラーの養成ってこんなに手探りなのだ、ということです。授業の構成や教官が伝えたいことが定まっていないように感じたり、ポイントが伝わってこなかったりしたことが、院生にとってはつらいことだったように思います。また、後期のロールプレイなど、担当される教官によって、スタンスややり方（たとえば、到達点のレベル、タイムスケジュールなど）が異なっていたことが、不安に思うことでした。前期を経て、後期になってくるにつれ、対話によって徐々に授業に対する不安や疑問は解消されていき、学習環境は快適なものになっていますが、より実力を伸ばすための課題が新たに出てきているので、教官との話し合いや院生同士の話し合いが常に欠かせない状況です。これまであまり討論という場を経験していないため、院生になって新たに獲得を迫られた能力であり、しかも私にとって問題が大きく、多かったため、負担は重かったです。しかし、社会人や遺伝カウンセラーに必要な話し合うためのスキルは、この一年間で培われたのではないかと思います。

昨年の春、念願の京都大学大学院医学研究科専門職課程に入学してから、はや一年を迎えようとしている。これまでの時間は私にとって大変めまぐるしくも充実した一年であった。現在もまた、勉強や実習を夢中でこなす真っ最中だが、新しい年度を迎えるにあたり、自己の反省を含めてこれまでの感想を述べたい。

〔社会健康医学系専攻全体について〕

カリキュラムの中のコア科目では、コースの院生だけでなく他の専門職学位課程の院生と一緒に受けることができた。このおかげで自分とは異なるバックグラウンドの人たちとディスカッション・演習を行うことで、新たな視点での意見を聞くよい機会になった。特に前期は遺伝カウンセラーコース必修以外の科目履修も多く、正直ハードスケジュールで自分としては講義内容を充分消化できていないように感じていたが、今となれば、受けたテーマをその後何度も反芻することによって自分の知識となっていくものだと実感しているので、少し無理をしてでも履修しておいてよかったと思っている。

また、「ゲノムひろば」の参加においては、方針が決定するまでの長時間の議論や作業を要したが、社会健康医学系専攻の枠を越えての自主的な取り組みを行うことができて、社会との関わりを実感するよい経験であった。

〔遺伝カウンセラーコース・実習について〕

遺伝カウンセラー・コーディネーターコース共通科目や遺伝カウンセラーコース科目については、講義方法や内容に関して、各担当の先生が学生の意見を取り入れてくださり、講義の回を重ねるごとに、よりニーズに沿ったものにしていただいたという印象を持っている。このような過程を経験できるのも一期生の特権であると思うが、できればコースディレクターの小杉先生以外の教官の先生も交えた意見交換・ご指導の場をもう少し設けていただければもっとよかったと感じている。実習の体制や記録、電話対応などについても上記と同様である。

合同カンファレンスでは、後期の実習が開始してからはケースのプレゼンテーションを主に院生が行うようになり、この準備の段階で実習の振り返り・考察・問題の明確化や課題について担当教官による指導を受けることができ、実習での学びをより深いものにする機会になっていると思う。最近、遺伝子診療部の担当医や他施設からの参加医師によるプレゼンテーションも行っているが、今後も院生だけでなく、医師や教官によるプレゼンテーションを交えていただくことで、より視野の広い学びやディスカッションにつながるように思う。また、一年目から多くの学会やセミナーに参加させていただき、遺伝カウンセリングや自己の課題を考える上でのモチベーションにつながり、大変有意義であったと感謝している。

遺伝カウンセラー・コーディネーターユニットの一員として過ごした一年間

遺伝カウンセラーコース ○○ ○○

2年間という短期間で必要なことを身につけるべく、緻密な工夫を凝らして組まれたカリキュラムは、どれもが知的好奇心を刺激する内容で、学ぶことへの意欲が衰える間もなかった。

講義は、基礎中の基礎から最先端の知見までが、初学者にもわかりやすく、しかし、最終的な到達点があくまでも、自立した職業人として不足ない域まで到達できるよう、十分な内容を盛り込んでのものであった。初めて触れる内容であっても、理解が深まってゆく喜びを感じることができた。

わからないことや、さらに学びを深めたいことがあれば、知識と経験が豊富な教官陣に相談し、熱意ある指導が受けられる。学外のセミナーや学会への出席の機会も十分与えられ、様々なバックグラウンドの人たちと交流を通じて、広い視野を身につけられるように支援されている。日本一充実したコースであることは間違いない。

大変恵まれた環境で学ぶ機会を得られたことに深く感謝を申し上げたいと思う。

もっとも、充実したカリキュラムのおかげで、唯一悩まされたことがある。それは、講義時間が夕方遅い時間帯にある場合、家庭を持つ私には、夜間の時間帯をやることの負担が、予想以上に大きかったことである。もっともこれは、京都大学大学院という、混迷を極める時代において、社会から寄せられる期待がより一層大きくなっている大学院に設置されたコースである以上、家庭を持つ女性院生への配慮まで求めることは無理というものであり、学ぶ側の責任で判断すべきこと考えている。

遺伝カウンセリングは、日本において新しい学問領域であり、遺伝カウンセラーの養成カリキュラムも時代のニーズや学問としての成熟度が深まると共に、変化していくことが考えうる。しかし、京都大学遺伝カウンセラーコースでは、時代の変化に柔軟に対応できるような幅広い教育内容が、1期生であるメンバーに提供されているように思う。どのような時代においても、十分に活躍できるような教育を受けた以上、今後、自ら一層の研鑽を積むことで、カリキュラムの消化が不十分な部分を補い、飛躍を目指したいと思う。

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットでの一年を振り返る

臨床研究コーディネータコース

1. カリキュラムと講師陣について

私は、臨床研究コーディネータコースに所属していますが、遺伝カウンセリングと臨床研究と両方を同時に学習することができたことに大変満足しています。カリキュラムは非常にハードなものでしたが、GCとCRCには共通する点も多く、両者がひとつのユニットになっている意義を感じています。講義や実習内容は、現場での実践を意識しており、それが何よりもよい点だと思います。

また、このユニットがSPHに存在している意義を、入学後改めて認識しました。具体的には、広く公衆の衛生を考えるとという点から、疫学や医療統計の視点を学習できたことは、最終的に医療と社会の接点で働く私たちにとって、重要な視点になると感じました。

講師陣については、ユニット専属の講師はもちろん、SPHの講師陣からも専門職としての知識、技術に加えて、あるべき姿、講義方法などを学ぶことができ、満足しています。

2. 学習環境について

学習目標を達成するにあたり、学習環境としてさまざまな支援を受けることができ、大変ありがたいと感じています。具体的には、個人へのパソコン（ソフト）の提供、教材図書を提供、ユニット共有で自由に使える図書やデジタル機器があること、学会等への参加に係る費用の支給などはどれも大変ありがたい、このような支援が学習意欲を一層掻き立ててくれたことは言うまでもありません。

また、これら環境の整備、事務手続き、そして日々の生活のさまざまな点をサポートしてくださる教務補佐員がいてくださることは、勉学に集中できる要因のひとつだと感じ、感謝しています。

3. 今後への期待

今後、このユニットがよりよい教育を提供する場であるために、希望することを挙げさせていただくとしますと、カリキュラムについては、関連する法的側面について学習できる機会があればよいと感じます。

またこのユニットが、JSTのサポートのものとしては、5年という期限つきであることがとても残念です。同志が増えることを望む一期生としては寂しく感じっていますが、それはここで嘆いても致し方ないことですね。失礼しました。

1 年間を振り返って

臨床研究コーディネータコース ○○○○

もう 1 年過ぎたのかというのが、正直なところでは、
無我夢中でここまで来たように思います。
このコースの事があるのを知って、これこそ、私の進む道だと考えたのですが
入学してからは、講義の多さに、時々入学した事を後悔したのも事実です。

新設コースのため、何もかも手探りであるという事もあり、戸惑う事もありました
がその分、先生方の熱意でカバーされてきたように思います。
1 期生 9 名は、バックグラウンドや年齢もばらばらですが、なぜか不思議な団結力で
よくまとまっていると思います。このメンバーがいたからこそ、前期の恐ろしいほどの
過密スケジュールを乗り切れたのではないかといまさらながら感謝しています。

学習に関しては意欲さえあれば、できる限り要求に応えようという先生方の熱い思い
が感じられますので後はどこまで自分の目的をはっきりさせていくかではないかと感
じています。

そのためにも講義の内容を自分なりに消化する時間や、みんなで講義を離れてじっく
り語れる時間があつたらよかったのではないかと何度も感じました。

その点は 2 期生のカリキュラムに少しゆとりができてるように思いますので、私
たちの体験が生かされたかと感じています。

後期になってからそれぞれの実習や講義の選択によりなかなかユニット全員がそろ
う機会がないのが残念です。部屋も分かれているため、なかなか会えなかったりするの
で 1 科目ぐらい全員が必須のものがあつてもよいかもしれません。

この1年間を振り返って

臨床研究コーディネータコース ○○ ○○

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットの一期生ということもあり、どのような2年間になるのかと期待と不安が入り混じる思いを胸に抱えたまま迎えた入学式から早1年、もう既に半分が経過しました。振り返ると、前期は一日の大半が講義への出席や課題レポート、後期は更に就職活動も加わるなど、常に時間に追われています。しかし、臨床研究に必要な学問である疫学、統計、倫理を学ぶことは将来臨床研究に携わる職種に就くときに役に立つことばかりなので、忙しいですが充実した生活を送ることができております。

まず入学後に本専攻の講義を受講して感じた事は、遺伝カウンセラー・コーディネータユニットに限らず、聞くだけではなく、学生同士でディスカッションをする講義が多いという事です。本専攻は医者、看護師の医療従事者の方々や、私のような非医療従事者のような方バックグラウンドが多様です。そして、バックグラウンドの違いにより、皆着眼点が異なるため、ディスカッション時間新しい発想を発見するいい機会になりました。同じバックバックグラウンドが異なる友人は私の発想の限界を補完する存在ですので、今後も大切にしていきたいと思っております。

後期に入ると講義ではなく実習が多くなったのですが、実習中に行った模擬患者とのロールプレイにより、改めて患者さんの相手をするCRCという職種の難しさを改めて痛感いたしました。更に後期は就職活動が始まり、就職活動により授業をやむなく欠席せざるを得ない状況が増えてきました。その点で後期の講義の目標を達成したとは言いがたいので、来年度も講義を聴講します。

来年度は実習や課題研究と学外での活動が多くなり、今以上に多忙な生活が予想されます。しかし、国内で臨床研究コーディネータの教育体制が整っていない中で、今後残された1年間で臨床研究に携わる仕事に必要な、より多くのこと学び、課題に取り組みたいと考えています。